

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：55402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370258

研究課題名(和文) 禅林文芸における絶海中津とその門流(霊松門派)の存在意義

研究課題名(英文) The raison d'etre of ZekkaichUshin and his ReishOmon-pa in a Zen sect literature

## 研究代表者

朝倉 和 (Asakura, Hitoshi)

広島商船高等専門学校・一般教科・教授

研究者番号：00390493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：禅林の文学における「詩の総集」には、伝誦や口承により、作者名や題辞が曖昧な作品が含まれる。しかし、『翰林五鳳集』に収録される絶海中津の詩は、主な収集源が『蕉堅藁』に限られる。また、東福寺霊雲院蔵『花上集』の巻末には、義堂周信・万里集九らの艶詩とともに、絶海に仮託された詩群が見受けられる。これらの現象は、当時『蕉堅藁』がかなり流布しており、絶海が禅林の文学史上、(仮託されるほど)重要な位置にあったことを証していよう。

『花上集鈔』における絶海・鄂隠慧・西胤俊承の詩や抄文を読解すると、彼らの典拠の使用状況が、絶海とその門流(霊松門派)の詩の特徴や本質を見出すきっかけになることが理解される。

研究成果の概要(英文)：An anthology in a Zen sect literature includes oral traditions whose titles or authors are uncertain. But the main sources of the poets by ZekkaichUshin in “KanringohOshU” are limited in “ShOkenkO”. In the appendix of “KajOshU” owned by TOfukujiReiun’in, we can find love poems by GidOshUshin and BanrishiUku and a group of poems assuming the name om Zekkai. This shows that “ShOkenkO” was very well known and that Zekkai occupied an important place in the history of Zen sect literature.

Interpreting poems or commentaries by Zekkai, Gakuin’ekatsu and Sei’inshunshO in “a Selection of KajOshU,” their usage of works or historical events will reveal the essence and nature of the poems by Zekkai and his ReishOmon-pa.

研究分野：日本中世文学

キーワード：国文学 中世文学 五山文学 絶海中津 蕉堅藁

## 1. 研究開始当初の背景

「五山文学」とは、鎌倉・室町時代に五山派の禅僧によって作成された漢詩文や、漢籍の注釈を核とする文学・学問活動を言う。なお、五山派に属さない禅僧の漢詩文をも視野に入れる場合は、「禅林の文学」と呼称するのが一般的になりつつある。五山文学の研究状況は、国文学の分野においては「傍流の文学」「学界の孤児」として敬遠される側面があった。文学的な研究が低調であった理由は、作品が難解だからであり、その具体的な要因としては、日本漢文であること、禅語が駆使されていること、作者である禅僧の悟境が超論理的に表現されることが多いこと、経書・史書、經典・禪書、詩文集というように典拠が多岐に渡っていることが指摘できる。

さて、近年は、平成 17-21 年度特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 寧波を焦点とする学際的創生」(通称：にんぷろ)において、中国哲学・中国文学・東洋史・日本史・日本美術史・日本文学等の研究者が関わって、東アジア全体における様々な文化的交流の中で五山に焦点が当てられた。また、岩波書店の『文学』第 12 巻第 5 号(2011 年 9,10 月号)においては、空前絶後の「特集=五山文学」が企画されたり、伝承文学研究会 平成 24 年度大会(9 月 1-2 日、於 学習院女子大学)では、「禅林の文化と説話 絵画と抄物をめぐって」というシンポジウムが催されている。一見すると、五山文学研究のブームが到来しているかのような印象を受けるが、実は五山禅僧の作品集に真正面から挑んだ研究は皆無に等しい。その理由は上記の通り、作品が難解で、作品研究の糸口が見付けづらいからであろうが、報告者はこの傾向に危懼を覚える。他の文芸ジャンルとの境界線辺りで論じるだけでは、五山文学の真髄はいつまでたっても理解されないのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

報告者は数多くいる禅僧の中でも、特に絶海中津(1336-1405)に注目する。その理由は、法兄義堂周信(1325-88)と共に「五山文学の双璧」と称えられていること(江戸時代の江村北海『日本詩史』による評言)、建仁寺の友社を形成し、多くの文芸上の門生を育て、抄物類によく所説が引用されること、中国への留学経験があり、中国語が堪能で、現地の高僧や士大夫等と交流があったこと、足利義満(1358-1408)と交流があったり、京都五山第 2 位の相国寺に三住するなど、幕府とも関係が密であったこと、五山派の最大勢力である夢窓派の一員であり、多くの法系上の門弟を育てたこと等が挙げられ、五山

文学史の中でも、禅林社会の中でも最も重要な位置を占める禅僧の一人と考えるからである。絶海や彼の門流(霊松門派)に関して追究すると、五山文学や禅林社会を取り巻く世界が核心から解明できるのではないかと期待される。なお、絶海には『蕉堅藁』という詩文集と、『絶海和尚語録』(宗教的な詩である偈頌を含む)が残っているが、文学的な研究対象となるのは、前者の方である。また、文学活動が確認できる、主な門下生として、二世の鄂隠慧歳・西胤俊承、三世の寿春妙永・琴叔景趣・旭岑瑞杲に注目する。彼らの作品集は、以下の通りである。

鄂隠慧歳・『南遊稿』  
西胤俊承・『真愚稿』  
寿春妙永・『湯山聯句(鈔)』  
琴叔景趣・『梅陽琴叔百絶』『松蔭吟稿』  
旭岑瑞杲・『日下一木集』

## 3. 研究の方法

(1) 絶海『蕉堅藁』・鄂隠『南遊稿』・西胤『真愚稿』・『湯山聯句鈔』・琴叔他『梅陽琴叔百絶』・琴叔『松蔭吟稿』・旭岑『日下一木集』の諸本収集をし、各作品集の諸本を体系化することにより最善本を選定する。

(2) 『蕉堅藁』と『湯山聯句鈔』は岩波・新日本古典文学大系シリーズに入っており(前者は詩部のみ)、前者には陸木英雄氏『蕉堅藁全注』(清文堂、1998)もあるので、それらを参考に読み解く。上記二書以外の作品集は先行研究が殆ど無い状態なので、訓読・語釈・通釈を一連の作業として取り組む。その際、『大漢和辞典』や市木武雄氏編『五山文学用語辞典』を調べたり、五山文学作品や抄物から用例を集めたり、中国の典拠を確認し、語釈する。

(3) 『花上集鈔』『湯山聯句鈔』『中華若木詩抄』等を参考にしながら、各禅僧に特徴的な素材・表現・典拠等を抽出し、それらが絶海門下特有のものなのか、それとも同時代的な五山文学の特徴なのかを見極める。その過程において、絶海が「五山文学の双璧」と称えられる所以を、表現面・発想面に具体的に求める。なお、霊松門派以外の禅僧の作品は、『五山文学全集』『五山文学新集』『続群書類従』等を利用する。

(4) 「詩の総集」や未刊行の別集を調査・確認して、絶海の散逸作品を探り、作品研究を進展させたり、『蕉堅藁』が当時、どのように流布していたか、を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 諸本収集

絶海中津及び彼の門下生の作品集の諸本を収集した。写本の所在が不明の作品集や、活字本（五山文学全集・続群書類従）しか残っていない作品集があるので、主な訪問先は、西尾市岩瀬文庫、国立公文書館 内閣文庫、東京大学史料編纂所、京都府立総合資料館、建仁寺西院、福井県立図書館である。絶海『蕉堅藁』、鄂隠慧歳『南遊稿』、西胤俊承『真愚稿』、『湯山聯句（鈔）』、琴叔景趣他『梅陽琴叔百絶』、琴叔『松蔭吟稿』、旭岑瑞泉『日下一木集』の伝本をスムーズに収集できた。一方、念願の前田家尊経閣文庫所蔵の『翰林五鳳集』20冊を複写できたことは、大変意義深かった。『翰林五鳳集』は、絶海や彼の門下生の作品を収録する、五山文学唯一の勅撰漢詩総集であり、当該禅僧の（散逸）作品や、本文異同を確認する上でも、大変貴重である。

##### (2) 絶海中津仮託の新出史料から見えてくること 絶海は禅林の文学史上、重要な立場に位置している。

『花上集』とは、本朝禅僧の七言絶句詩のみで構成された、五山文学における代表的な詞華集（アンソロジー）であり、京都五山における、有名な20名の詩僧 義堂周信・絶海中津・太白真玄・仲芳円伊・惟忠通忍・謙岩原冲・惟肖得巖・鄂隠慧歳・西胤俊承・玉畹梵芳・江西龍派・心田清播・瑞巖龍惺・瑞溪周鳳・東沼周暉・九鼎竺重・九淵龍暉・南江宗沅・如心中恕・希世靈彦の七言絶句詩を各10首ずつ、合計200首集めている。彦龍周興による序文によると、文学少年と風流・文筆の志を同じくする親友が、近代諸老の佳作を抜き書きして一編と為し、作詩の教科書・参考書として文学少年に贈ったことが知られる。

『花上集』の諸本中、特に東福寺霊雲院本の巻末には、横川景三作と解される詩60首の他、『五山文学新集』第6巻に抄録されている『明叔録』に見られる、陸奥出身の某喝食が詠じた「残臙鬱懷依孰開、乍迎高客拂塵埃、再遊使処約時節、雪后江村月在梅」の28字を、詩尾と詩首にそれぞれ置いた計56首の万里集九詩や、「戀部」という部立のもと、横川や義堂や万里の艶詩とともに、報告者未見の絶海の詩群が列挙されており、非常に注目される。

残念ながら、結論的には、絶海に関する新出史料ではなく、絶海に仮託された詩群であったが、「艶詩（詞）」の製作は、禅林の公的な性格を帯びた文書の文体である四六文（啓筭）や、詩会活動における詩作の作法の

修練に繋がり、若い作者（差出人）にとっては、五山の文壇である「友社」への入社を果たすための重要な文筆修業の一側面を担っている。一方、横川は、五山文学版『百人一首』の撰者であり、何よりも『花上集』の命名者である。また、室町後期の文筆僧の大半が師事した、文壇の大御所五山文学僧でもある。永享元年（1429）に生まれ、明応2年（1493）に亡くなっているため、『花上集』に作品が採られる、20名の作者よりもわずかに生没年が新しいものの、少年僧の目指すべき文筆僧として、『花上集』に作品が入集されても全く遜色ない、言わば、『花上集』21人目の作者であるという意識が、書写者の脳裏に存したのではないだろうか。

霊雲院本の巻末に、作詩の教科書・参考書レベルとして相応しい横川の詩群や、絶海に仮託された詩群を含む、多くの艶詩とそれに類する作品が書き記されているということは、結果的に、喝食や少年僧（文学契選）の文筆修業のためという、『花上集』の編纂目的や利用目的をより一層際立たせる効果を生み出しているのではないかと、報告者は結論付けるに至った。なお、ある詩群の作者を絶海に仮託することの、禅林文芸における意味合いに関しては、もう少し事例を集めてから述べた方が確実である、絶海が禅林の文学史上、（仮託されるほど）重要な立場に位置することは容易に想像される。

##### (2) 代表的な「詩の総集」(『翰林五鳳集』)に収録される絶海作品の主な収集源が、『蕉堅藁』に限られること 当時、『蕉堅藁』がかなり流布していた。

『翰林五鳳集』（以下、『五鳳集』と略す）は、元和九年（1623）に後水尾天皇（1596-1680）が以心崇伝（1569-1633）らに命じ、代表的な五山詩僧の詩偈を撰集、書写せしめた、五山文学唯一の勅撰漢詩集である。同集には禅僧の散佚作品が多数収められていることから、研究者からは特に注目されている。一方、伝本によって差異があるが、全64巻で収録作品数（16,000～17,000首）や作者数（200名弱）も膨大であり、その収集源や収集態度は、未だに判然としないところを残している。報告者は絶海中津の作品に注目して、如上の研究状況に一石を投じることを試みた。

結果、現在最も流布しており、唯一の翻刻本でもある大日本仏教全書本『五鳳集』巻第48に見られる、絶海の詩文集『蕉堅藁』に未収録の絶海詩3首は、『五鳳集』の清書本（原本）により近い形態を留めていると考えられる国会図書館 鶯軒文庫本を参照すると、詩の配列順序の違いから、絶海の商品ではないことが判明した。（横川景三・天隠龍澤の作）一般的に「詩の総集」には、伝誦・口承によ

り、作者名や題辞が曖昧な作品が含まれる。『五鳳集』所収の絶海の作品に、彼の詩文集である『蕉堅藁』に未収録のものは見当たらず、『五鳳集』の収録作品は、絶海の場合、基本的に『蕉堅藁』が主な収集源であることが確認された。

ただし、『蕉堅藁』の89番詩が重複して採られていたり、『五鳳集』の跋文にその作品名が引用されていたことから、絶海の作品も採られている、五山文学における代表的な詩選集(アンソロジー)である横川撰『百人一首』(100首所収、すべて七言絶句詩)や『花上集』(200首所収、すべて七言絶句詩)も収集源として数えられよう。

### (3)『花上集(鈔)』に収録される絶海中津・鄂隠慧歳・西胤俊承の詩に見られる典拠の使用状況の追究 絶海とその門流(霊松門派)の詩の特徴や本質の解明に繋がる。

『花上集鈔』所収の絶海、及びその門下生である鄂隠慧歳・西胤俊承の詩や抄文を読解すると、以下のことが判明した。

絶海は義堂周信に次いで第2位に位置付けられ、しかも11首(他者は大略10首、11~21)が採られているが、後世の評者が選ぶ、彼の代表詩との重複は少ないようである。絶海は中国滞在中に詠んだ叙景詩の表現描写が評価されており、それらの作品では、典拠はあまり多くない。対して、『花上集』所収の絶海詩は典拠を用いた語が多く、それらを逐一指摘する抄文は、読者への配慮が感じられる。【主な典拠:『莊子』齊物論、『文選』高唐賦、『詩経』唐風、李白『桃李園序』(『古文真宝』)、『広韻』、『楚辞』、『三体詩』、『長恨歌』、『蘇東坡詩』、『王安石詩』、『開仲見詩』(『錦繡段』)、『曹操』短歌行等】

鄂隠の詩として採られる10首(74~83)は、典拠の引用は淡泊で、叙景詩が多い。【主な典拠:黄山谷詩、『北山移文』、林和靖・王謝・戴安道の話、『詩学大成』、杜甫詩、湯惠休詩、放翁詩等】

西胤の詩の10首(84~93)も、典拠の指摘は少ないが、かといって叙景も不徹底のように見受けられる。抄者も「乍去此十首内ニハヨイ詩ハイラヌゾ。」と冒頭に評している。【主な典拠:班婕妤の話、蘇東坡詩、『論語』、林和靖の話、黄山谷詩等】

五山文学(禅僧の文学)の特徴としては、禅的発想と、博引旁証(数多くの書物等をあさって用例を多く集め、それらを証拠として説明すること)の徹底とを挙げることができる。前者は既成の価値観の一新・転換を意味し、「価値の転換」とも呼称できる。世に称する「禅味」も、このことを意味していると考えられる。後者に関しては、禅僧の悟境や宗旨を比喻(典拠)によって表現したり、四六文が流行したため(「機縁の語」が

必要)禅僧は、観念の上で形づくられた世界を形成していた。中川徳之助氏は、これを「観念形象」「観念的世界」とも呼ばれた。翻って今回、その一端が明らかになった絶海詩・鄂隠詩・西胤詩の典拠・比喻の使用状況を追究すると、絶海とその門流(霊松門派)の詩の特徴や本質に迫れることが期待される。

『花上集』において、絶海・鄂隠・西胤の三僧は、相国寺を代表とする僧として選ばれている様子である。二十僧の中では、建仁寺僧の選出が優勢である中で、絶海とその法嗣である鄂隠・西胤によって、相国寺の詩壇の中核が形成されたという理解が背景にあるように理解される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

朝倉和、「東福寺霊雲院蔵『花上集』巻末の附載雑録の翻刻」、『広島商船高等専門学校紀要』、第36号、平成26年3月、pp.84-94

朝倉和、「東福寺霊雲院蔵『花上集』巻末の附載雑録の翻刻( )」、『広島商船高等専門学校紀要』、第37号、平成27年3月、pp.122-128

朝倉和、「東福寺霊雲院蔵『花上集』巻末の附載雑録から見た禅林の文芸 喝食・少年僧を対象とする文芸の隆盛」、『和漢比較文学』(和漢比較文学学会)、第55号、平成27年8月、pp.37-53 **【査読有】平成27年度研究実績報告書に記載漏れ**

朝倉和、「『翰林五鳳集』所収の絶海中津の作品について 国立国会図書館蔵 鶺鴒軒文庫本も視野に入れて」、『古代中世国文学』(広島平安文学研究会)、第26号、平成28年3月、pp.27-32

[学会発表](計 1件)

朝倉和、「東福寺霊雲院蔵『花上集』巻末の附載雑録から見た禅林の文芸 喝食・少年僧を対象とする文芸の隆盛」、第123回和漢比較文学学会西部例会(於:大手前大学)、平成26年4月

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朝倉 和 (ASAKURA HITOSHI)  
広島商船高等専門学校・一般教科・教授  
研究者番号：00390493

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：